

〈美術館〉というトポスをめぐる試論(2)

ARAKAWA, Yuko / 荒川, 裕子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007358>

〈美術館〉というトposをめぐる試論 2

法政大学キャリアデザイン学部教授 荒川 裕子

■ 展示空間の拡張

美術館の内と外とをつなぐ試みとしてまず挙げられるのは、美術館が主体となって実施する展示活動において、自らの建物のみならず、その外側へも展示の場を拡張していくというスタイルであろう。たとえば水戸芸術館現代美術センターで断続的に開催されてきた「カフェ・イン・水戸」は、日本におけるその種の最も早い事例のひとつといってよい。

2002年に始まったこのプロジェクトは、Communicable Action for Everybody（誰とでもコミュニケーションできる行動）の頭文字（C・A・F・E）をつなげるとともに、西洋近代の初頭以来、新しい思想や文化、アートなどを生み出すインキュベーターの役割を果たしてきた都市のカフェの伝統をも含意するタイトルをもち、ちょうど人々がカフェに集うように、アートを介してさまざまな人たちのあいだに自由な交流が生まれることを目指している⁽¹⁾。2002年の第一回目は、同年8月から一ヵ月半ほどのあいだ、芸術館のギャラリー内ばかりでなく、水戸の中心市街地の商業施設や周辺のギャラリーにも作品が展示された。一例を示せば、活字を用いたインスタレーションで知られるイチハラヒロコは、商業ビルの垂れ幕や銀行のATMの封筒といった、市民の日常生活に直結した道具立てのなかにアートを紛れ込ませた〔図1〕。こうした作品の展示と平行して、ギャラリー・トークやタウン・クルーズなど、プロジェクトに対する理解や関心を深めるためのプログラムはもちろんのこと、アーティスト自身の主導による、多くは市民参加型のワークショップも多数用意された。

6 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号



図1 第一回「カフェ・イン・水戸」の展示風景

右手のビルの壁に、イチハラヒロコの活字作品（垂れ幕）が設置されている（図版出所：水戸芸術館 HP <http://www.arttowermito.or.jp/cafe2004/cafe04j.html>）。

このように、美術館の建物の内部で展示が完結する従来の展覧会とは異なり、多様な空間や手段を通じて人々がアートに触れる接点を設けることは、なによりもまず、しばしば難解とされ、それゆえに敬遠されることも少なくない現代アートにアクセスすることを容易にし、その豊かな発想や変化に富んだ表現をじかに体験する機会を拡大することにつながる。事実それは、「人々がゆったりとコーヒーを飲むような気安さで、アートに接しアートへの扉を開いてほしい」⁽²⁾という主催者側の意図にまさしく合致するものであった。先に、美術館という装置が抱えるジレンマのひとつとして、あらゆる市民に対して平等に開かれていることを原則としながらも、実際にはアートに関する知識や興味の度合いによって鑑賞者が選別されかねない点を指摘した。そもそも美術館の建物の入口で、来館者（すなわち鑑賞の意思を明確にもっている者）とそうでない者は、きっぱりと「ふるい分け」られてしまう。それに対して水戸のプロジェクトのような場合、少なくとも美術館の外側に広がる展示においては、両者のあいだに線引きが行われることはなく、そこから潜在的な鑑賞者が掘り

起こされていく可能性も含んでいる。人々は街なかで、ときにそれとは意識しないまま作品に遭遇し、あらゆる先入観を捨象した状態でアートを楽しむこともありうるのである。

初回の反響を受けて2004年に開催された第二回目の「カフェ・イン・水戸」では、前回のテーマ「アートを介したコミュニケーション」を基本的に継承しながらも、作品の展示空間を拡張することでアートの門戸を広げるだけでなく、美術館の所在地である水戸市という土地の固有性をより強く意識したプロジェクトが展開された。事前に、地元の青年会議所やNPOと連携して勉強会やフィールド・リサーチ、連続講座などが実施され、それらを通して「アートの視点を取り入れた街づくり」という新たなヴィジョンが構築されていた⁽³⁾。その成果は、たとえば美術館にほど近い地域にある幾つかの空き家を、アートの要素を織り込みながら新たな空間へと変貌させた「リノベーション・プロジェクト」〔図2〕や、大学生たちによる街の調査を土台として、水戸市の現在の姿を独自の解釈で可視化した《健康診断地図》と冊子『dead or alive 水戸空間診断』の刊行などに結実し、メディアからも大きな注目を集めた⁽⁴⁾。単独の作品のなかにも、水戸の街をモチーフに用いて表現したものが散見されたほか、道路わきの塀や商店のショー・ウィンドウ、工事現場の囲いなど、それぞれの作品が設置される「場」とのコミュニケーションを活かした例も目立った。これらに見て取れるのは、アートが——モダニズムの美学において追求されたように——それ自身のうちで自己目的化する代りに、「街の持つ潜在的可能性を発見し、活性化させる」⁽⁵⁾ためのきっかけを作るという、より開かれた、社会的な機能を果たしているということである。

このように、アートが、ひいてはアートと市民をつなぐ役目を担っている美術館が、審美的な目的を超えて社会のさまざまな課題や要請に対応していこうとする姿勢は、水戸市の事例に限らず、今や世界各地に共通して見出せる傾向といってよい。とりわけここで注目したいのは、美術館とその背景をなす都市との関係（の変化）である。近代初頭に美術館という文化装置が誕生して以来、それは基本的には市民の文化的啓蒙を目標に掲げつつ、同時にまた、その建物を擁する国や都市にとっては、地域の文化的水準の高さを示すシンボリックな指標としての意味を担ってきた。しばしば指摘されてきたように、高度経

8 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号



図2 「植物の家」

第二回「カフェ・イン・水戸」で実施された、アトリエ・ワンによるリノベーション・プロジェクトのひとつ。もと歯科医院であった家の屋根を取り払い、植物が生育できる空間を作り出した（図版出所：『CAFE in Mito 2004』98頁）。

済成長期に日本の各地に公立美術館の建設が相次いだのも、同様の文脈に沿ったことであった。しかしながら近年、美術館をはじめとする文化施設は、都市の文化的威信を体現する不動のアイコンという静的な存在から、都市そのものの成長や発展、あるいはアイデンティティの構築にも主体的に関わっていく動的な機関と見なされるようになってきている。

■ 都市との共生

そうした都市と文化施設との有機的な結びつきの深化は、たとえば「ヨー

「ヨーロッパ文化首都 European Capital of Culture」の変遷に端的に見て取ることができる。1985年に始まったこのプログラムは、「ヨーロッパの人々に、各々の都市や地域、国などに固有の文化的相貌を広く伝え」、「ヨーロッパ文化の豊かさや多様性と人々が共有する特質に光を当てるとともに、ヨーロッパ市民が互いにより深く理解し合うことを促す」ことを目的として、毎年、EU加盟国のなかから選ばれた都市が、年間を通じて美術や音楽、演劇など、さまざまな文化イベントを展開するものである⁽⁶⁾。発案国がギリシアであったことから第一回目の開催地となったアテネに続き、フィレンツェ、アムステルダム、ベルリン、パリなど、当初は一国の文化を代表する都市、いかに言えばすでに豊かな歴史や文化遺産を有し、美術館や劇場といった文化的インフラストラクチャーも整備された都市が選定されてきた。

しかしよく知られているように、1990年の開催地グラスゴーを境に、「文化首都」（当時の名称は「ヨーロッパ文化都市 European City of Culture」）の目的は、文化の振興や文化を通じた交流といった、文化それ自体を軸としたものから、開催都市における経済的あるいは社会的な波及効果をも考慮に入れたものへと拡大していった⁽⁷⁾。そのような方向性の転換を、美山良夫は、「文化芸術モデル」から「都市再生モデル」を経て「社会経済モデル」へ、ないしはこれらの複合形態へ、という図式によって整理している⁽⁸⁾。1995年から2004年までの「文化首都」の歩みを総合的に調査・分析した、いわゆる「パーマー・スタディ」によれば、開催を希望する都市がその理由として挙げたもののうち、もっとも多いのは、

- ・ カルチャル・ツーリズムの促進
- ・ 都市のイメージの刷新
- ・ 都市の知名度の向上
- ・ 都市再生のための手段として活用
- ・ 経済復興の戦略の一環として活用

であったという⁽⁹⁾。産業構造の変化により、かつてのように製造業を中心とするハード面の強化がそのまま都市の繁栄に結びつくという道筋がもはや成り立たなくなった現在、文化というソフトの要素が都市の再生や活性化に大きく寄与することが期待されているのは明らかである。実際、ここ数年間の開催都市

10 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

を眺めてみても、スタヴァンゲル（ノルウェー、2008年）、リヴァプール（イギリス、2008年）、リンツ（オーストリア、2009年）、ヴィリニウス（リトアニア、2009年）、エッセン（ドイツ、2010年）、ペーチ（ハンガリー、2010年）といった具合に、新たに EU に加盟した国も含め、多くは知名度においていまだ十分なアイデンティティをもちえていないか、もしくは旧来の産業の不振により経済的な低迷に悩んでいる都市が、自らの文化的ポテンシャルを掘り起こし、それを充実させていくことによって、地域の発展の推進力にしようとしていることがうかがえる⁽¹⁰⁾。

一方、日本においては、「文化首都」に比するような組織立った文化振興のためのプログラムは今のところ見当たらない⁽¹¹⁾。とはいえ、事後評価というようなかたちではあるものの、たとえば文化庁は2007年から、「文化芸術の持つ創造性を活かした産業振興や地域活性化に戦略的に取り組み、ひいては地域から世界に向かって文化を発信する地方自治体を応援する」ために、文化庁長官表彰のなかに新たに「文化芸術創造都市部門」を設置し、「自治体側の施策と、文化芸術を担う、あるいは支える芸術家や文化団体、住民の情熱や創造性とがあいまって、他のモデルとなる地域づくりを推進」している都市を、毎年4つずつ表彰してきた（このような顕彰制度が創設されるにあたり、「ヨーロッパ文化首都」が大きな示唆を与えたのはいうまでもない⁽¹²⁾）。ここでいう「文化芸術」には、音楽、映像、美術などのほか、自然や町並みの景観、祭、さらには農文化まで幅広い領域が含まれているが、それらのうち美術館に焦点を当ててみると、都市と美術館との共生を積極的かつ多角的に推し進めている点で、初年度に受賞した金沢市がとくに注目される。

2004年に開館した金沢21世紀美術館は、建築家ユニット SANAA の設計による開放性の高い建物、無料で作品を観賞することができるゾーンを広くとったレイアウト、体験型の作品を多く含むコレクション、市内の小学生に対する無料招待など、市民のアクセスを重視した設計・運営によって当初から高く評価されてきた〔図3・4〕⁽¹³⁾。だがそれにとどまらず、2008年秋には、「アートを介して人々が出会ったり、情報が行き交うことで新しい出来事の誘発を可能にし……社会のさまざまな枠組みのあいだに新たなバイパスをつくること、人々のあいだに対話を生み出し、都市がいきいきとした活動の場となることを



図3 金沢21世紀美術館の外観

建物の内と外の境界を感じさせない、透明性の高い建築デザイン。

目指し」⁽¹⁴⁾で、美術館のみならず、街なかの商業施設、大学、民家、神社、公園など、市内の随所——参加アーティストのひとり宮田人司は、もはや現実にある場所ですらなく、ウェブ上に自らの作品を設置した——においてアート作品の展示やアーティストによるワークショップを展開する、「金沢アートプラットホーム2008」を開催した。

このプロジェクトでは、美術館の壁を超えて展示の場を拡張・多元化していくだけでなく、中村正人やカミン・ラーチャイプラサート、小沢剛、丸山純子など、ギャラリーのなかにとどまることなく社会のさまざまな現場に自ら赴き、ワークショップというかたちで人々を巻き込みながら、表現としてのアクションを起こしていくタイプのアーティストたちを意図的に多く選定している。たとえば丸山による《空中花街道》は、市内のお年寄りたちの協力を得て、レジ袋を再利用して作った何千本もの花を商店街に据えたインスタレーションであった。このように、アーティストと市民の協働が生み出したものをプロジェクトの主眼に据えることによって、本来の主催者である美術館はむしろ

12 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号



図4 金沢21世紀美術館の常設展示

同美術館の目玉のひとつともなっている、レアンドロ・エルリッヒの体験型作品「スイミング・プール」。

後方に退き、代りにアートを媒介として、金沢の街とそこに住む（あるいはそこを訪れる）人々が前景化されることになった。もちろん、プロジェクトそれ自体を構想し、アーティストを選び出し、展示やワークショップの手配を行うといった一連のプロセスは、そうしたことがらの専門家であるキュレーターを擁する美術館のイニシアチブによって遂行された⁽¹⁵⁾。だが結果としてここでは、美術館というアートの専門機関と一般の人々の、いかえればアートを発信する側とそれを受けとめる側のポジションが限りなく水平なものとなり、いずれも都市という共通の土俵のうえで、街に生命を吹き込んでいく当事者として等しい立場におかれているように見える。そのような共生のヴィジョンは、

プロジェクトのテーマである「自分たちの生きる場所を自分たちでつくるために」にもはっきりと読み取ることができるだろう。

都市という共通分母を土台として美術館と市民との接近が図られている例は、同じ2008年秋に開催された第三回目の「カフェ・イン・水戸」にも見出すことができる。今回の実施形態は、これまでとは少々異なり、同時期に水戸芸術館のギャラリーで開かれた「日常の喜び」展とも連動しつつ、「第23回国民文化祭・いばらき2008」の参加プログラムのひとつとして企画された。とはいえプロジェクトそのものの主旨は4年前の第二回目をほぼ踏襲し、水戸の市街地を舞台に、アートと都市、アートと市民とのコミュニケーションを重視した展示やイベントが繰り広げられた⁽¹⁶⁾。たとえばそのひとつ「妄想屋台連合」は、半年以上におよぶワークショップを経て、市民の手でオリジナルの屋台が24台制作され、プロジェクトの期間中に一般の来訪者との交流の場となったものである〔図5〕。今回も、水戸青年会議所や商工会議所など、地域を担う他



図5 「妄想屋台連合」

第三回「カフェ・イン・水戸」に出展した市民の制作による屋台のひとつ「もうそう動産案内所」(図版出所:『第23回国民文化祭 記録集』28頁)。

14 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

の団体の支援のもと、まちづくりに関連した企画が平行して実施されたが、なかでも際立って特徴的なのは、クリエイティブな発想を備えた若手の市民有志の団体「MeToo 推進室」が新たに立ち上げられ、アーティストの選定から展示の設営まで、美術館とともにプロジェクトの運営を担ったことである⁽¹⁷⁾。前回までの「カフェ・イン・水戸」や先に挙げた「金沢アートプラットホーム 2008」などでは、アートと地域の相互交流を謳いながらも、実際には美術館（ないし美術館が依頼したアーティスト）が先導してアートと都市をつなぐ回路を築いていた。それに対して、市民主体の組織である MeToo 推進室の活動は、「美術館側」が発信するアートを受けとめるだけでなく、地域の側からもアートに向かって能動的にアプローチしていくという、双方向の流れが成立しうる可能性を示したのである。水戸美術館のキュレーター竹久侑は、「アート側」（すなわち美術館側）の主導による地域活性化のためのプロジェクトについて、アートの公益性を自明のものと捉えている美術館は、その強固な確信ゆえに、かえって地域の具体的なニーズや課題を見逃してしまいかねないことを指摘し、そうした弱点を補完するものとして、「街を領域とする人々」とパートナーシップを組むことの重要性を強調している⁽¹⁸⁾。そのような提案は、些か大仰に言えば、これまで自律的なアートの専門機関として機能してきた美術館における制度の組み換えを示唆するものといえるだろう。

先にも述べたとおり、美術館という文化装置が社会に向かってより開かれていくこと、とりわけそれぞれの美術館が根ざしている（はずの）地域との連携を深め、都市再生の推進力となることが強く求められている現在、美術館の展示活動においては、「アートのためのアート展から、街のためのアート展へ、そしてコミュニティー作りのためのアート・プロジェクトへ」⁽¹⁹⁾という動きがますます広がっていくことが予想される。とすればその際、美術館はもはや単独で展示プロジェクトの遂行を担うのではなく、MeToo 推進室の例に見られるように、空間的にも制度的にも美術館の文字どおり「外側」にいる人々と、さまざまなかたちで協力関係を築いていくことがいっそう必要となるだろう。美術館という公共の文化施設が生まれて二百年ほど経った今、その「公共」の意味を現代のコンテクストに即して検討しなおし、近代のはじめ以来継承されてきた展示／鑑賞のシステムを再考する時期にさしかかっている⁽²⁰⁾。

[注]

- (1) 2002年に実施された「カフェ・イン・水戸」の開催主旨や展示作品一覧、関連イベント等の詳細については、水戸芸術館公式ホームページを参照。
<http://www.arttowermito.or.jp/art/cafe01j.html>
- (2) 水戸芸術館現代美術センター『CAFE in Mito 2004』（展覧会記録集）、2004年、50頁
- (3) 2004年の第二回「カフェ・イン・水戸」については、『CAFE in Mito 2004』に包括的な記録が載せられている。
- (4) たとえば、朝日新聞2004年9月21日夕刊「屋根はがし、見えた歴史」、日本経済新聞2004年7月31日地方経済面（茨城）「水戸再生へ若手の熱気生かせ」、など。
- (5) 森司『「水戸再発見」への実践的アプローチ——3つのアート・リノベーション・モデル』『CAFE in Mito 2004』所収、93頁
- (6) 「ヨーロッパ文化首都」の概要については、主に以下の「パーマー・スタディ」を参照した。

European Cities and Capitals of Culture: Study Prepared for the European Commission, Part 1, Palmer/Rae Associates, 2004, 47.

なお「ヨーロッパ文化首都」は、1999年までは毎年1都市で開催、同年「文化都市」から現在の「文化首都」に名称が変わり、2000年に一挙に9都市が選ばれた後、基本的には毎年2都市で開催されている。

- (7) 1990年にグラスゴーで開催された「ヨーロッパ文化都市」の成果については、さまざまところで言及・評価がなされているが、以下の文献ではそれらがコンパクトにまとめられている。

Beatriz Garcia, “Urban Regeneration, Arts Programming and Major Events: Glasgow 1990, Sydney 2000 and Barcelona 2004”, *International Journal of Cultural Policy*, Vol. 10, No. 1, 2004, 103-108.

これによれば、「ヨーロッパ文化都市」をきっかけとして、かつての低迷した都市というグラスゴーのイメージが、デザインや建築に優れ、ショッピングやビジネス、会議場などにも適した文化の中心地へと大きく変貌した。たとえば1991年から98年までのあいだに、同市を訪れたイギリス人は88パーセント、外国人は25パーセント増加したという。このような変化は、地域のアーティストたちやビジネス関係者が自尊心や信頼を取り戻す

16 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

契機ともなった。

- (8) 美山良夫「文化施設の今後——公共理念の再定義に向けて」『文化施設の近未来——アートにおける公共性をめぐって』所収、慶応義塾アート・センター、2007年、32～33頁

- (9) *European Cities and Capitals of Culture*, op. cit., 47.

- (10) たとえば2008年の開催都市のひとつであったリヴァプール市は、リヴァプール大学等の協力を得て、「文化首都」が同市に与えた社会的、経済的、あるいは文化的影響を継続的に調査するプログラム「IMPACT 08」を実施し、効果測定モデルを構築しようと試みている。

<http://www.liv.ac.uk/impacts08/About/about.htm>

もちろん、文化やアートを通じて都市再生を図ろうとする動きは「ヨーロッパ文化首都」に限られるわけではなく、本稿で触れる余地はなかったが、たとえばチャールズ・ランドリーほかが提示した「創造都市 Creative City」の考え方も、現在、日本を含め世界の各地で実践に移されている。以下を参照。

佐々木雅幸『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』岩波書店、2001年

国際交流基金（編）『アート戦略都市 EU・日本のクリエイティブシティ』鹿島出版会、2006年

佐々木雅幸（編）『創造都市への展望：都市の文化政策とまちづくり』学芸出版社、2007年

- (11) 地域を主体として定期的開催される文化プログラムとしては、1986年に文化庁の提案で始まり、以来毎年各県が持ち回りで実施してきた「国民文化祭」があるが、アマチュアを中心に国民の文化活動への参加を促すことが主目的であって、「ヨーロッパ文化首都」のように地域活性化とダイレクトに結びついたものとは性格が異なるといえよう。

- (12) 「文化庁長官表彰 文化芸術創造都市部門 受賞都市」文化庁長官官房政策課、2009年、1頁

併せて以下も参照。

「文化芸術創造都市に関する調査研究 調査報告書」(株)リベルタス・コンサルティング、2009年

なお、これまでの受賞都市は以下のとおり。

横浜市・金沢市・近江八幡市・沖縄市（2007年度）、札幌市・豊島区・篠山市・萩市（2008年度）

- (13) 金沢21世紀美術館については、すでに数多くの書籍や雑誌記事で紹介されているが、ここでは主に以下を参照。

蓑豊『超・美術館革命——金沢21世紀美術館の挑戦』角川書店、2007年

- (14) 「金沢アートプラットホーム2008」プレス・リリース、4頁

http://www.kanazawa21.jp/exhibit/k_plat/press-release/

なお、このプロジェクトは今後も3年ごとに開催される予定である。

- (15) このプロジェクトが目ざしているフラットな構造は、単独のキュレーターによって企画される通常の展覧会とは異なり、4名のキュレーターが複数の視点から展覧会を構成している点にもうかがうことができる。

- (16) 第三回「カフェ・イン・水戸」については、以下の記録集に詳しい。

『第23回国民文化祭・いばらき2008 水戸ルネッサンス文化の祭典 記録集』水戸芸術館現代美術センター、2009年

- (17) MeeToo 推進室の詳細については、同書14～15・82～83頁参照。

- (18) 竹久侑「街と美術館が当事者となり補完しあうこと」同書81～83頁

- (19) 同書80頁

- (20) 本稿では、現代アートを専門とする美術館の事例を中心に論じてきたが、歴史的なコレクションを軸とする美術館においては、むしろ同じようなスタイルの展示プロジェクトを実施することは難しい。とはいえ後者もまた、美術館の内と外とをつなぐためにさまざまな試みを行っている。ここでは一例として、2007年夏にロンドンのナショナル・ギャラリーが企画した「グランド・ツアー The Grand Tour」展を挙げておこう。この展覧会は、ナショナル・ギャラリーに近接した商業地域の路上に面した壁に、レンブラントやフェルメールからターナーやモネまで、同美術館が所蔵するいわゆる「名画」の原寸大レプリカを44点展示したものである。その目的は、近隣に住んで（あるいは働いて）いる人々に、この地域が豊かな文化財を有していることを認識してもらうと同時に、日常生活のなかで自由に作品とコミュニケーションを取ることを促すことにあった。詳しくは以下を参照。

Tiger Seen on Shaftesbury Avenue; The National Gallery's Grand Tour, National Gallery Company, London, 2008

18 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

付記 本文中の図版は、とくにことわらない限り筆者撮影

本研究の一部は、2008年度法政大学特別研究助成による成果である。

ABSTRACT

An Essay on the Topos of “Museum” 2

Yuko ARAKAWA

Here I explore the possibility of the art museum’s attracting the general public which includes not only the museumgoers but also those who seldom step into the museum’s building. Through the examination of several art exhibitions recently held in Japan, such as “CAFE in MITO” and “KANAZAWA Art Platform 2008”, we find it more effective to extend the display beyond the wall of the museum to the downtown area in order that more people can appreciate the works of art freely and casually, which might lead them to visit the museum itself eventually.

It is also noteworthy that the works of art exhibited closer to people’s daily life may not only give them more opportunities to recognize the aesthetic value of the art but also help them find or reevaluate the potential of the city where they live or work. That the cultural programs including art exhibitions might have great effect on urban regeneration is widely approved nowadays. The most conspicuous examples can be found in those cities like Glasgow and Liverpool which were chosen as the European Capital of Culture. Though we do not have a similar program in Japan, the Agency for Cultural Affairs began to commend every year several cities for their realization of the so-called Cultural City.

In the art exhibitions mentioned above, it is quite distinctive that the curators of the museum always tried to cooperate with the local citizen in many ways. This should enable the art museum to be a part of the community where it is located and promote the urban regeneration there.